

第4回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2023年12月9日(土) 10:00~12:00
◇場所 県立万葉文化館
◇参加者 【学生】川田、東、井上
 【万葉文化館】井上、阪口
 【大学教員】加藤、米田、大西 計8名

単元構想案の検討

1) 東晃太郎さん(社会科教育専修3回生) 中学校3年 総合的な学習の時間

「近江の海 沖つ島山 奥まけて 我が思ふ妹が 言の繁けく」

「あられ降り 遠江の 吾跡川柳 刈りぬとも またも生ふといふ 吾跡川柳」

二首とも柿本人麻呂が詠んだ歌(近江八幡、静岡にそれぞれの歌碑がある)

近江と遠江・・・似ているけど、何が近くて何が遠いのだろう

「あふみ」淡海(琵琶湖)・・・近江 「とほつあふみ」遠い淡海(浜名湖?)・・・遠江

→ 万葉集に収められた歌に出てくる地名に興味を持たせる

滋賀や静岡など大和以外でも万葉集が詠まれている

「万葉集はどれだけの場所で詠まれていたのだろうか?」

万葉歌碑の分布を調べ、全国地図にシールを貼り付けていく

「なぜ、万葉集は日本の全国各地で詠まれていたのだろうか?」

万葉集を調べて、関心をもった歌や身近な地域の歌を発表しよう

【意見交流から】

- ・導入でいきなり「近江」「遠江」が出てきて難しいのでは?

→ 最初に身近な地域の歌で入って、先に全国の歌を調べシール貼りでもいいのでは。

- ・「万葉集」に収められている歌が、「万葉歌」であるという理解をしてほしい。

巻7は作者不明の歌が多く、様々な地域の歌が意図的に集められていると考えている。

- ・地名で万葉歌を探っていくのはおもしろい。

- ・最後に発表させるのは、何をどのように発表させたいか?

→ どの地域でも、思わず歌にしてみたい風景や景観がある。そんな表現することへの思いに迫りたい。

- ・歌には詠まれているが、今はどこか分からないような地名もある。それがどこかを探っていくのも楽しいと思う。

- ・大伴家持の邸宅が今の一条通りにあったという。家持作の歌を紐解くと見えてくるものがある。そういう探究的な学びはおもしろい。



2) 井上寿美さん(大学院教育学研究科 伝統文化教育・国際理解教育専攻)

小学校6年 総合的な学習の時間「詩歌を表現してみよう」

まずは詩吟を体験させる(2時間)

漢詩「寒梅」を見て、そこに書かれた意味を考える

詩を声に出して読む 発声 吟じる練習 グループ・全員でミニ発表

「万葉集の和歌を朗詠しよう」 詩吟よりもっと昔の歌

「瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばまして俣はゆいづくより来りしものそまなかひにもとなかかりて
安眠しなさぬ」(山上憶良)

→ パズルにして現代の言葉に当てはめてみる(万葉仮名でも) 和歌で歌ってみる

漢詩と万葉歌との共通点について知る

万葉文化館の見学と講話・・・万葉集についての理解 万葉歌の歌い方

和歌や漢詩を、書道や絵、音楽などに表現 構成吟や書道吟に挑戦 → 発表会

「今まで奈良に伝わっている文化は他にはないだろうか？」

【意見交流から】

- ・6年生にとって、歌の意味を理解することは難しい。歌について調べるのも、ネットから調べると疑わしいものもあって、そこは情報リテラシーに関わってくる。
- ・奈良に伝わる文化とは何をイメージしているか？
→ 墨、筆、太鼓、祭り、習俗など、何でもいいと思う。どのように受け継がれてきたのか、なぜ受け継がれてきているのかが感じられればいいと思う。
- ・発表会にあたり、「何でもいい」ではかえって子どもが困る。いくつかを提示して選択させる方が。
- ・万葉文化館に実際に行くことで、「歌垣コーナー」から万葉歌の歌い方を学べる。研究員の方との出会いもあって、学びが深まる。図書コーナーで調べることも可能。
- ・歌をどれだけ自分事のできるかがカギ。そのきっかけが詩吟というのが目新しい。

卒業論文中間報告

川田大登さん(国語教育専修4回生)

中学校国語科における『万葉集』教材の開発についての研究

-古典の世界に「親しむこと」に着目して-

中学校国語科における『万葉集』の指導に関連する指導事項

第3学年〔知識及び技能〕(3)ア

「歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。」

古典の世界に「親しむ」ことができる授業がなされているか疑問

中学校3年生で古典の学習が「あまり好きではない」、「嫌い」と答えた生徒の割合は7割弱

「意味が分かりにくい」「難しい」「面白くない」「めんどくさい」・・・

古典の世界と現在とでは、言葉や文化的背景が大きく異なることがあり、それによる古典の世界のわかりにくさがある

教科書の記載を見ても、歌同士のつながりを見出しづらく、歌ごとに一貫性のない指導に終始してしまう可能性がある



→ 『万葉集』の世界に親しみを持たせる教材の検討

視覚的に『万葉集』または学習する歌の世界をイメージできる視覚的な教材の開発

【意見交流から】

- ・現在の教科書が、「親しむ」ではなく「理解する」ものになってしまっている。(受験対策)
- ・教科書の脚注にある歌の解釈がすべてではないはず。
→ 「主体的な解釈、批評を行い、価値を発見する」方が大切
- ・視聴覚教材として、万葉日本画が使えるのではないか。
- ・いかに内面化させるかが大事なはず。そうでないと「親しむ」にはならない。
万葉人とわたしたちはいっしょなんだと実感できることが大事。

